

2015年(平成27年)

5/7 (木)

Thursday

きょうの

発言

国立ハンセン病療養所・菊池恵楓園(合志市)で、平均年齢83歳を超える入所者に代わって園内を案内するボランティアガイドの活動を始めて6年目となります。きっかけは、養成講座を通じて入所者自治会や多彩なガイドの方々との出会いと学びでした。

養成講座も5月中旬に開催される第8回から「よくわかるハンセン病問題講座」と改め、名

高谷 和生 くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク事務局長

## ボランティアガイド

称もリメイクされ、幅広い学びの機会として提供されます。回復者自らが語る生の体験を心に刻んでください。

しかしながら、ハンセン病回復者の願いやガイドの思いが届かなかつたりする出来事が起きています。2013年12月、県外の小学校から自治会に届いたハンセン病学習の感想文には、差別を助長しかねない言葉もありました。また、社会交流会館の見学では、他校の児童が展示物の「隔離の壁」によじ登ったこともあったといえます。

私たちのガイド活動にも問題

は無かったのでしょうか。日々のガイドに追われるあまり、活動の基本となるガイドラインの作成や入所者との交流、資料館の調査支援等の組織化が図れていません。

熊本県の「無らい県運動」検証委員会の報告書最終頁の冒頭には「差別と偏見を終わらせる第一歩は、正確な情報を学ぶ」と記されています。

私たちは「善意の加害者」として二度と過ちを起さないよう、回復者やその家族の人権を守り、多くの仲間とともに歩いていかねばなりません。

2015.5.7